

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成21(2009)年
7月号

通巻467号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

発行日 平成21年7月23日
発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
印刷 大倭印刷製
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



写経道場の庭(一心寺) 大阪府豊中市 森脇 聖淳さん撮影(文・3頁)

対談

昭和31(1956)年8月1日発行 第20号『大倭』より

神は幸福を与えない。幸福は
吾が心に常住する。
信仰は幸福を見出し、幸福へ
の道を啓く。

神示

奈母太加天腹
拍手合掌

信人に告ぐ!!
堅実な大倭の歩みについて
再認識せよ

法主 矢追 日聖

(満44歳)

大倭の立教開宣を記念し、東方の瑞光を仰いだ東光祭は来たる八月二十日(旧七月十五日)、大倭大本宮に於いて執行するのであるが、この日の宗教的意義についてはよく御存知のことと思う。しかし人は案外吾がことには暗いが、人ことはよく気のつくもので、大倭の信人でありながら肝心の大倭の味がはつきり分らない者が相当あるように見受けられる。この際、特に他宗教と比較して大倭の正しき姿を再認識されんことを要望する。

一、文部省から「不正な宗教活動について」の通知、国調第二一〇号昭和三十一年六月二十一日付にて、「このたび、衆議院法務委員長及び参議院法務委員会から別紙のとおり、決議ならびに申入れがありましたので、貴教団においても、この趣旨のあるところを御諒承の上、人権の尊重、公の福祉などの点において、社会の誤解を招かな

いよう、格別の御配慮をわずらわしたく、念のためにお知らせいたします。」

これを別紙として衆参両院の決議文及び申入書を添付されてある。誠に念の届いた文部省の通達には非常に嬉しく感謝している。

両院の言わんとするところは、ほぼ一致した見解のようである。その問題とするところは「布教その他の方法において不当に人心を強制し、或いは基本的人権を侵害するが如きことは許されない。云々」、或いは「いわゆる新興宗教団体のなかには大衆の無智、病氣、貧困、精神的苦悩などに乘じ、あるいは暴行、脅迫によって加入の強制、寄附の強要、脱退の阻止につとめ、また窮迫のあまり自殺者、精神病者を生ぜしめる等、基本的人権を侵犯し、法令に違反し、著しく公共の福祉を害し、また宗教団体本来の目的を逸脱するものが、少なからず見受けられる。云々」。

衆院の決議文の中には、その代表として、「」を挙げ、人権侵害問題を調査したことが記されている。右に掲げられた行き過ぎな行為は末端教会や布教師の常套手段で、あえて実名を取り挙げて言わなくてもよいことだ。

都会に、或いは村落にあつても、対立的信者の争奪戦が展開され、信者獲得の為なら宗教本来の目的など意中にあるはずがない。宗教は企業なりと考え、信者は財源として扱う。こうした觀念が一般新興宗教に共通した概念のように思われ、かかる線に伴つた動きが社会の福祉にかえつて反し、目に余る醜き姿を現代人の前にさらけ出していると言える。心ある者、泣かざるを得ない。

二、宗教の企業化は墮落である。人心の安定と社会福祉を目的とする精神的行動がその使命でなければならぬ。

新興宗教の罪業は、一応誰も非難する。けれ

ども一段と視野を広くして眺めた時、ただ新興宗教だけがと、簡単に片付ける訳にはいかない。せんにつめれば既成宗教が先ずそれらの生みの親であることが指摘できる。何故このような放蕩者かできたのかと嘆く前に、この親にしてこの子ありと心からの反省が必要である。

既成宗教はその活動も低調であり消極的であるから、社会に対してその弊害は認めないが、それと言つても宗教開祖の御遺徳によって何とか生きていけるからで、こうしたぐうたらな行き方にあきたらなく思う不平分子、それから各宗派教団の組織が搾取的機構になつているので高い所の土持ちはいやだと信者を握つて分裂する反逆者、それに加えて迷い悩む社会人の切実な願いを持つ人達、その解決を盲目的に新興宗教に求めアヘンの慰安と幸福に酔いたくなる。その代償とする金品等についてはさほど問題にしない。ここが新興宗教家のねらいにして、段々巧妙に企業化していく。宗教の仮面をかぶつた企業化は新興宗教のみではない。古き神社を始め伝統を持つ寺院等もその類であつて、宗教の本来の目的の影は目を追つて消えつつあるような現状である。

新興宗教は、信者を財源として、喜ばして金をしぼる。既成宗教は、先覚者の遺した塔塔伽藍及び美術工芸品を骨董的に或いは芸術的に価値付けて、まるで特殊博物館のように観覧料を取っている。京都・奈良で問題になつていいる観光税について宗教家が騒ぐのは不思議である。

財源だからとそんな骨董物を手放すことの出来ない小心どもが、どうして生きている人間の救済が出来るか。速やかに古文化財として政府に献納し政府に保護をゆだね、先人の残した遺物に頼らず古い伽藍から足を洗つて、社会大衆の中に裸で飛び込むだけの宗祖開祖のような肚があるなら

は、新興宗教などは生まれるはずがない。

又社会人も宗教に対して認識不足であるから、この点の啓蒙運動も非常に必要だと思ふ。迷惑をこうむるのは無知な大衆である。社会の福祉を願う者、挙つてこうした動きを見せてほしいと願う。

三、大倭信人の使命

宗教本来の目的から言つても、人心の束縛や人信の強制、脱退の阻止等は絶対に許されるものではない。ここで言う大倭信人は、文部省提出のインチキ統計の信人を指していない。終始一貫、大倭に帰依されている少数の者を指している。

東光祭も近づきつつある。大倭の立教は、今世人が望んでいる、そしてその期待にそう宗教として立っていることは信人の熟知しているところと信ず。こうした世論の声を耳にした時、大倭教の時代的必然性と、この宗教の育成がやがては社会を明るくする結果をもたらすことに気付くだろう。どこまでも堅実に宗教の線はずさず、企業に陥らず、専ら社会の福祉の為に生命を捧げている日聖の心を心として、強き信仰を続けてほしい。(昭和31年7月12日記)

再録 同号より

法主様より聞く 霊動のおはなし (三)

神憑りの「お告げ」の真偽は？

それでは「おがみ屋」をやっている人達は、その殆どがこれら等のどれかの型を一応通つていいると言えるのです。

實際吾々が生活している上に於いて一面、おが

み屋や易者のような職業もあってもいいと思いますが、というのは健康で普通の生活をしている時はそのような類は頭から「迷信だ、人を迷わすものだから社会から葬ればよい」とえらく強気で論じていても、子供なんか次々と患ったり事業が思わしく行かなければ、理性を超えて盲目的にすぎりたくなる。これが人間の弱さでも言えるのでしようがね。

中には神様のお導きで幸福になったと一時的にもせよ喜ぶ人と、だまされたと不幸の上塗りをして怒る人も出来来ます。

そこで神様のお告げというものは「お代さん」を通して確かにあるものですかね。その真偽はさっぱり分からない。信仰に入っている人の口に言わしむれば絶対に神のお示しだ、百発百中だと高言するし、だまされた人は全部神をよそおったデタラメだと言いますし……。

この問題をはつきりしない限り、かえって信仰が自己及び社会の福祉に相反する結果が起こってくる訳ですからね。この点いかがでしょうか？
法主 すべてのことに行き詰まった時に、人間の弱さが案外はつきり出る。このような場合、奇蹟や神秘を信じなくなる。そういうふうに心の迷う人達が次々と社会に出来てくるので、いかがわしい神様やおがみ屋の類はあとをたたない。
そもそもだ、おがみ屋になった所謂神さんの経

歴を見れば、先ず第一に気の付く点は、その大多数が女性にして生活苦に悶えた中年層で、社会的教養や常識に欠けた者がその大部分を占めているようだ。彼女等が救いを神に求める時は、既に或る程度神経衰弱にかかっている。もし滝にでも打たれ一心に吾が身の助けを願ったとすれば、子宮を冷やして冷えのほせて分裂症状を起こす。この時、自分で念じている不動さんか或いは巴さんの

お姿を「はつきり拝んだ、えらいお陰をさずかった」と喜び、熱心に水垢離を続けることになる。

勿論、神さんが降がる時には手が動くという自己意識も手伝って霊動も起き、自分の潜在意識が神のお示しと信ずるような精神状態になる。ここまで行けば、もうおめでたい自他共に認める神憑りの先生である。

この間、NHKラジオ放送の連続で「母のえくぼ、牽牛と織姫」だったと思うが、これは新興宗教の教祖の赤裸々な姿を画き、教祖のインテキ性と、欲の為に盲信する信者に対する、両者の反省をうまく含ませて社会教育の資料に扱われているところを面白く拝聴した。

御神示がある、ないの問題よりも御神示と称するそのものの解釈が至極難しい。

表紙写真によせて

大阪府豊中市 森脇 聖淳

「暑中お見舞い申し上げます」平成21年 盛夏
こんなお葉書を頂戴した。差出人はおおやまとの重鎮、反保隆臣さんからでした。

そういえば随分長い間、エイちゃん叔母ちゃん（かゝさん）の家を訪れていなかった!! 家麻呂さんは元氣やるか？ 日元さんは元氣やるか？
おおやまとの人々の顔が浮かびました。

そんな日の夕方、電話のベルがなった。受話器を取るとFAX受信でした。不吉な予感がした。

【訃報】 父、松田育三（享年73歳）が7月3日亡くなりました。通夜は7/6、告別式は7/7、葬儀場所は奈良県・生駒市セレニクス瑞光。息子さんからのFAXでした。

松田育三さんは内科医の先生で甲野善紀さんとの交流があり、時々おおやまとに一緒にされたら

おがみ屋さんの言う「お告げ」は殆どが自己意識で、もし入神状態になって神意などを伺った時は、時々畜生霊（狐、蛇、狸等）の霊波を受けることがあるから、その場合、合うこともあれば全然合わないこともある。

畜生霊の波長を受けてそれが声となって聞こえたり、また映像として見えたりするお代さんは、勿論大なり小なり脳組織に異状があるから、平素の談話にでも常識を欠く場合が多いと言える。

この種の人達はこれを以って御神示だと信じ、大胆に人に明言する。合わない時は、伺った人の信仰が足りないかと上手に逃げる。こんなことは信じない方が利口だね。
漢字や送り仮名は、現代風に改めていきます。（終）

法主さまがお話をされた後、かゝさんが「この人の話、嘘ばかりやで、信用したらアカン」。この一言で松田医師はかゝさんのファンになられたとのこと。

「あゝゝその かゝさんと言うのは、私の叔母ですもん」
こんな会話をしたのは今から25年前のことでした。

通夜に出席する前に、暑中見舞いの葉書を頂戴した反保さんにお礼かたがたご挨拶とおおやまとにお邪魔しました。反保さんはいつものように、にこやかに私を迎え入れてくれました。同県人とあって故郷和歌山の話に花が咲きました。帰りに「暑いから、扇子を」とパツクから取り出した素敵な扇子を頂戴しました。

友人の死がきっかけで、おおやまとにお参りさせて頂いたことに感謝する今日この頃です。

わづらわしさを生ずる力に

石川県白山市 森 要 作

ワンススクールというフリースクールを立ち上げ十一年になる。二十代前半、大学に夢を持って、たまたま入った演劇サークルにて舞台の楽しさを知り、自分の実力も考えず、芝居で食べると大学を中退、東京にでも、ストレスで身も心も壊し、故郷の石川に戻ったのは二十年前。その後いろんな出会いがあり、心について、体について、いのちについて考えるうちに行き着いたのは教育の道。日本中の田舎がリゾート、パブルでみどりが壊されていた時代だった。田舎の中に日本の未来あり、ここから理想の学校をつくってやる、若さゆえに飛び込むことができたのがフリースクールだった。この時代いるんなものが細分化され全体を見ることができなくなってきた。食べ物は大地とのつながりであり、魚は山の豊かさであり、心臓は東洋医学で言うところの手の小指と関係し等々、関係性でなりたっているのがいのちなのだんだんその関係を実感できる場が減っている。それと子供たちの心の荒廃は決して無関係ではない。関係性がひとつ切れることにいのちのエネルギーが滞る。田舎に住んでいるうちにそんなことが見えてきて、**いるんないのちが行き合えつながら** **りあっている**ことを体感できる場にしたいということ。ワンススクール」という名前をつけた。

そして今風に言えば発達障害と言われる子が学校で居場所を失い、教育問題となっていた時代でもあり、親御さんともどもいろんな方、子供と関わらせてもらった。一番の思い出は日本風山小屋を皆で土地の開墾から行い半年がかりで完成させたことだろうか。数学をまったく習っていない子が綿密に墨うちや定規を使いこなししていくさまを見て、いったい勉強って何と考えたりしたものだった。実際中学へ行かず、高校で初めて学校へ行った多くの子が高校で上位の成績を収め、皆が言うことは「学ぶって楽しい」という言葉に、逆に若いときほど机の上でなく、いろんな実体験をしたほうが人は健全に育つんだなと自分にとってもいろいろ学ばせてもらえる場でもあった。海外へ二ヶ月ほどワゴン一台に乗り気ままな旅ができたのも学校へ行かない自由な時間があつたからで、参加したメンバーの半分以上が今は大学生となり、国際関係の学部ですんでいる。これもひとえに不登校だったから開けた自分の将来。不登校は時代の最先端、今でも不登校の相談があるこの言葉を話させていただいている。

その後、だんだん相談が二十代の引きこもりの若者になってきたこともあり、NEETと言われる青年たちの社会参加を支援する事業が活動の中心になっていった。国の少子化問題とのからみで国策として若者を働かせなければということ(?)で、県からも支援を頼まれ、まあ若者が悩んでいるなら何かのお手伝いできるかなくらいで始めたのだが、思いのほか多くの若者が家に引きこもり人生で足踏みをしているが見えてきて、この問題の深刻さを考えることになった。かつての若者は放浪しながら自分の人生を捜し歩いたのだが、今の若者は部屋の中で他への関心を持たず自分の頭とパーソナルな情報だけで人生を生きようとしている、でもその奥にある生きることへの切望。若い子供たちと違いある程度人格もできている若者たちゆえ、関わりの難しさを感じながらも、汗をかく体験と、出会う楽しさ、役に立つ喜びなどを体験できる活動を地道にしていくなかで一人二人と社会に出て行くものもでてきた。今は自前で「コミュニケーションたこ焼きや」をオープン、修行中の若者や、かつての若者がふらりと訪ねてくれたりと、若者たちの多少の心のよりにどこになつていけるのがあるがたい。

地域にひとつの電話が、家庭に一台となり、機能がで、さらには自分の部屋で誰とも関わらず携帯でやり取りできるようになった現在、わづらわしさからの解放が同時に子供たちの自閉を育てている。教育の実践者の言葉が実感をもって、今の子供たちと関わっていると見えてくる。彼らをもう一度世界に目を開かせるには、逆の「わづらわしさと不便さ」の生活の中で、うちから湧き出す生きているという実感、それを活動の中心として今までやってきた。なんとなくその方向がいいのではと十年活動してやっと今思えるようになってきた。二十代自分もいろいろ悩みいるんな人との出会いでなんとか生きる力をいただき今日までやってこれた。今の若者たちも現象としては違いますが生きる意味を見つけたかと思っていることには間違いはない。幸い昨年は高卒資格の取れる、サポート高校なるものを開校でき当初の理想の学校づくりが現実となってきた。問題はいつももあるが一歩前進を胸にこれからも石川にて本当に子供たちが必要としている学び場づくりを続けていきたいと思っている。

そんなこんなつぶやきを、かつての仲間、李章根君に原稿依頼され、この機会に振り返ってみようということを書かせてもらった。一読感謝。

こ
だ
ま
こ
と
だ
ま

群馬県安中市・西 川 弘 二

第2信の 平成21(09)年4月6日

何とか一緒に暮らし、妻も努力しながら耐えている様子が見えたので、反省する事を覚え始めてはいましたが、人間欲は強かったです。頭金もないのに家がどうしても欲しくて、知人から「基礎屋さんを作って売れずにいる家があるからどう?」と言われました。見るだけなら見たら感じが良かったので、頭金なしで申し込んだところ審査が通って、実家からも勤め先も遠いのは何故か買いました。(入居平成11年1月)

父の入院している病院へ行ったのは、マイホームが持てたのを自慢するためという性格の悪さですが、何だかんだと云っても父との交流が始まり出しました。兄は結婚して母と一緒に住んでいましたがお金の件でうまくいかに、アパートに出たため、僕が父(お金がいらない)と母の間に入って、年金の管理を見始めました。しばらくすると叔母(母の妹)から「あなたの親には、親族から家一軒分以上のお金を使わせられているのよ。だから年金は私が見る」と電話がありました。またしても両親に怒りがこみあげてきて、どうでもいいやと放っておくようになりました。

母が父以外の男性と交際しているのも見て見ぬ振りをしてしまいました。母の口癖は「お父さんが悪い」でした。ですが、その後は父の具合が良いので退院させて、両親2人で住む事になったよ

うで、少しはうれしかったです。しばらくすると母から妻に「お父さんがおかしい。おしっこもらした」と電話が入り、妻が「様子を見てこようか?」と言いましたが、断わりました。後日、父をまた入院させたという連絡があ

った時も放っておきました。何か訳が分かりませんが腹が立って、両親の事を考えたくありませんでした。

すると、1カ月程で退院すると言うのでホッとしながらも、「迎えに行ける?」という母の問いに「行かない」と答えていました。母は原付バイクで父の荷物を取りに行き、父はバスと電車で帰ったそうです。帰る途中、今度は母が事故に遭い、「そのまま入院した、荷物も返ってこない」と父が電話してきました。「迷惑なんだよ」と言いながら母の所へ行き、バイクを預かってくれている家へ父と一緒に挨拶に行く事になりました。父が手ぶらなので「何か持ってけよ」とスパーの前で車を止めて1人で買いに行かせ、妻と子供に「冷たいんねえ」と言われてもムカムカしていました。バイクと荷物も1人で取りに行かせたものの、後ろから付いて行って挨拶をして、バイクが動いたので乗って帰る事にしました。

家に送り届けると、父は妻に洗濯機の使い方を教わっていました。ふっと「一緒にめしを食おうか」、「しばらく家に来るかい?」なんて言ってもいいかなと思いましたが、甘やかしちゃいけないとなぜだか思いました。父や母を見ているとムカムカしてしよがなかつた。ですが、時間をかければ、直るんだろうと軽く考えていました。

しばらくすると父から「洗濯物があるから病院まで乗せて行ってくれ」と電話が入りましたが、「兄貴に言えよ」と軽く切っていました。

(切る前に10秒間程、無言でいた。今思うと涙です)それから9月28日、給料日で買い物しながら「何かおかずでも買って行ってあげようかな」、でも親達は気楽なもんだとも思い、「まあ、まだいいや」と気持ちを切り替えて行きませんでした。9月30日、母から退院するから「明日迎えに来

て」と携帯に連絡があつて、しよががなく「用意して玄関で待っているなら迎えに行つてやる」と言つと、「分かった」と言いました。10月1日、仕事帰りに迎えに行き、母に「お父さん、兄貴と来た?」と聞くと、「1人で雨にぬれながら来て、すぐ帰つたよ」と言つので、兄貴も断つたのかと、ちよつとかわいそうな事をしたけど、「ま、しよがないか」と思いました。

母を送つて、父の顔くらいは見えていくかと家に入りました。ラジオがかかっているので部屋をのぞくと、おかしなカッコーで口を開けて寝ているので、「起きろよ」と言いながらよく見ると、口の周りに小さな虫がいました。「何、やつてんだよ」と手をつかんだら冷たいので、「おいっ、何やつてんだよ」とを連発してしまい、死んでるつてやつと気付いて……自分を責めるより先に、「てめえが殺したんだ。お父さんが死んでうれしかった」と、泣きくずれる母を責め続けました。

枕元にティッシュの山を置き、その隣に洗面器に水を入れて、ティッシュを水にぬらして喉に詰まらせて……4つほど喉に入っていたそうです。残された遺書は「密葬でいいです、でした。葬式を済ませた後、姉から電話があり、母の悪口を言うなどガミガミ言つて話しにならない。一回忌には母や姉とも会いましたが、やはりムカムカして、もう会いたくないと思いましたが、家と携帯の番号を変えて音信不通にしました。

葬式を終えた頃から、胸の痛みや目まいがひどくなりました。医者に異常はない言われましたが、手足のしびれやぶくらはぎの痛みもありました(それでも食欲があつたのが変です)。この病気とずつと付き合っていくのかと思うと苦しかったですが、父と同じ死に方はしたくないから、考えないようにしていました。(続く)

寸 莎

第85回

杉山 節子さん(右)
徳永 光栄さん(左)



今も法主さんと共に

今回はいつもの寸莎と趣を変え座談会形式で話して頂いたものをまとめさせて頂きました。

杉山 節子 昭和9年生・東大阪市

大倭とのご縁は、私が十七の頃です。私の父の妹夫婦の所に法主さん日元さん鈴木母さんがお参りに来てはったのです。私の母親も昭和二十四年に亡くなってましたので、祖母が一度高林の家に来てもらって見て頂いたらどうかと言う事でお会いしたのが始まりです。昭和二十八年頃です。立派なお方やなと言つのが最初の印象です。それにヒゲね、法主さんも日元さんもヒゲで圧倒されました。

大倭に初めて来させてもらったのは十九歳の時です。富雄の駅から小さい山を二つ越えたと思います。ママ

シも出る言つて長靴履いてね、そら大変でした。

昭和三十一年に結婚して、それから苦労苦勞の連続で法主さんにはどんな事でも話さしてもらいました。法主さんは「あーせーこーせー、こーやで」とは絶対言われませんでしたけど、いろいろ自分で突き当たつて来て、今になって法主さんの言われた事がぼつぼつと不思議なくらい思い出して来ますねん、あーなるほどなど。やっぱり大倭へ来させてもらった五十何年というのは無駄じやなかった。今まで耐え忍んで来たのは法主さん鈴木母さんのお陰やと思つていつも感謝してます。

六十三年に主人が亡くなった時に法主さん達が来てくれはったんです。法主さんが「どんな事があつたかて柴地に相談するねんで」と慰めてくれはった。柴地さんも「元氣出して、僕も力になるから」と言つて

下さつて。おじいさんが亡くなった時も柴地さんが「心配せんでええ、後の事も相談に乗るから」と。今は杉本さんに元氣づけてもらつて何とか立ち上がる事が出来たと思います。法主さんは「前向きに何でも善いように解釈して振り向いたらあかんよ」と言われました。

娘のように大事にして頂いたご恩は一生忘れません。法主さんとは生きておられても死なれても変わらぬい感じで感謝致しております。

徳永 光栄 昭和4年生・大阪市

私は京都の生まれでね、小学校出るまではお父さんの兄弟の所におつたの。私が三歳の時にお父さんが、六歳の時にお母さんが亡くなって、長男は戦死。だから姉と私の二人きり。あつちこつち行かされてたから自分では何にもわからへん。そこへ病気がでた。一月に一回くらいふーつと倒れまんねん。それやつたら大阪のおばさんが助産婦さんしてるから、行つたらええやういう事になつてそこで用事をしながらずっと居りました。

後になって初めて法主さんを訪ねた時に「結婚したい人があるんですけど病気で倒れるんです。その人はかまへんと言つてくれるんですが結婚してよろしいでしょうか」と訊く

と法主さんは結婚しー言つて「血の道の病氣やから出産したら治る」と。不思議なほど結婚してからは一回倒れたくらいで子供ができたらピシャツと治りました。

大倭を世話してくれた人はヨナトリさんでした。ヨナトリ言うのは、助産婦の所へ後産で出た物を市が取りに来てはったんです。そのおじさんをヨナトリさんと呼んでました。布施の人です。

主人は鹿兒島の一歩の南端の出で大工でした。助産婦のおばさんの家を増築するので来て初めて知り合つたわけやね。結婚した頃に大工仕事でケガして、遠くて滅多に行かへんと思つた鹿兒島の親の所へ、一ヶ月子供連れて行きました。

それから大工をやめて私の姉婿の自動車整備会社で兄さんと一緒に死ぬまで働きました。日元さんが車の部品を買いに来てたから、うちのお父ちゃん日元さんよー知つてたよ。そやからちよいちよい主人と大倭に行きました。主人は亡くなるひと月前、大分と弱つてたんやけど、病院から大倭まで来ましてんで。

法主さんのお陰と思つてます。鈴木母さんもちよ「よー来た」言つてくれたし、私いつでも拝んできます。

大倭が大事という事、それだけ。

(聞き手「李章根」)

寸沙の取材を通して

李 章 根

今回はスペースがあるとの事で、いつもは顔を見せない聞き手からの感想を書かせて頂きます。

寸沙は現在、岸田哲さんと僕が交代で取材し書いています。第85回は、杉山さん徳永さんに、思い出すまま全く自由に、生きて来られた道のりを語って頂きました。お話を聞きましてまず感じた事は、ぴたーっと法主さんに心が向かっていて、生き死にに関係なく、いつも法主さんとおられる感じを持たれているのだなという事でした。

毎回、取材の中でたくさん印象的なお話があるのですが、紙面の都合で圧縮された形でしか読者の方々に届ける事が出来ないのは残念です。寸沙では大倭にご縁のあるたくさんの方々にご話して頂きたいと思っています。

どのように生きて来られたのか、特に僕の親の世代、祖父母の世代の話は極力聞いておきたい。そこからぶつとりと切れた形で自分達の世代も存在しないと思うからです。

「聞く」ではなく「聴く」という言葉には「待つ・ゆるす」という意味があるそうです。待つ姿勢のない所に、深い語りはつむぎ出されないうちに思います。ゆるすという行為は、自分の心に隙間を空けて耳を澄ますという事ではないでしょうか。昔、裸会で力を振り絞って人生を語り終えたと同時に倒れてしまった方がおられました。法主さんは一緒に涙を流しながら「過ぎ去った事はもう忘れ」と一言だけ言われたのを思い出します。取材を通して見えて来る法主さんの姿に宗教とは何なのかと考えさせられます。生活から切り離された教えがどこにあるというよりは、法主さんと縁者との関わりそのものの中に、言葉を超えたものとして存在しているように思えます。

こぼれずみ

あじき 杉 本 順

カルガモ記

六月四日の事でした。パソコンの目を休めて池の水面を眺めていた時です。一羽のカルガモが邑の鏡池に飛来してきました。

平成九年に、池のサネ島でたくさんの子供達を産んでくれ、邑の皆さんを大いに癒してくれた事がありました。もう一度そんな歓びにひたれたらと思つて教務本庁の事務所からのぞいていました。前回は番いのカルガモがいつも仲良く島にいたのですが、今回はなぜか一羽での飛来です。時々夜中に飛来して鳴き声をあげているのは知っていたのですが、こうして明るい時に鏡池に来るのは珍しい事です。

カルガモが雌か雄かは分かりませんが。池に餌をもとめて来たのだらうと思つていたのですが、どうも感じがちがいました。

すいすいと泳いではいれるが直ぐに島に上がり草むらの或るところでそわそわ、きよるきよる、暫くすると又池に、何度もこれを繰り返すのです。よく見るとお尻のあたりをもぞもぞする動作が激しくなり、どうも卵を産んだようです。「やっ」と喜びました。

草むらで卵を温め始めました。暫くすると急に親鳥が池に飛び込んだのです。

その瞬間、左上辺りからカラスが一羽、草むらに飛び込んできました。あつと言つ間のことです。幾つかの卵は全て食べられました。その間親鳥は声をあげませんでした。カラスは悠々と飛び去りました。

私の楽しみも一瞬でなくなりました。人間心で考えれば実に複雑でした。しかし加美(自然)さんは無常です。

東光大祭・祖霊祭

日 時：平成21年 9月3日(木曜日)

*午後1時20分より

東方の碑 拜礼所にて

*午後2時より

大倭大本宮拜殿にて東光大祭
奥津斎庭にて祖霊祭

■東光大祭とは 昭和二十一年旧七月十五日夕刻、現大本宮の東方の碑前あたりで法主様が農作業中、瑞光が天にあらわれて、天の声「黎明は訪れたり東方の光 大法は立てり大倭太加天腹」が聞こえ、宗教活動の本宮が現在の大倭紫陽花邑であることを示されたのを記念する大祭です。

■祖霊祭とは 大倭にご縁の皆さん方のご先祖諸霊を始め、それぞれにご縁のある諸霊を鎮魂慰霊するお祭りです。日頃霊界では互いに会えない霊人たちもこの日は会う事を許されるお祭りの日です。

当日夕方六時ごろに東方の碑あたりで満月の出を待ちながら東方瑞祥について考えてみませんか。直会も用意されます。どなた様もお気軽にご参加ください。

あじさい日誌

6月12日 鏡池堤防(禁足地)の車止めが作り替えられました。中野英樹さん(栃木県)来島、15日まで滞在の間に、自分の考察した道具を使って田の草取りをして、楽な使い方のコツを指導してくれました。

6月13日 せつかくだから無駄にしないようにしようと思志が、邑の梅の実採りをしました。

6月14日 榎会。5月号『おおやまと』を読み、興味本位になることには大変慎重であった法主さんの教えを念頭におきつつ「霊動」についての話題もありました。

6月15日 大倭神宮月次祭。

6月20日 大倭会館で「あじさいの箱」バザー、東方碑の所であじさい祭を同時開催。風の快いい好天に恵まれ盛況でした。

6月21日 第303回大倭会文化行事に参加者8人(内子供2人)。大阪府立弥生文化博物館では弥生時代について楽しみながら勉強が出来、その後、隣の池上曾根遺跡で復元した建物を見学。今後の発掘成果によっては邪馬台国の候補地になるかもしれないとボランティアアガイドさんが説明するのは思わず笑い。また近くに曾根神社が見えて、大倭神宮と同じ饒速日命



や素盞鳴命を祀っていることとで親しみを感じました。

この日は夏至、青山日元さんは満95歳の誕生日を迎えられお元氣です。群馬県安中市の桜井保・節子夫妻と娘の内田誓子さんもお祝いに来てくれました。

6月22日 大倭会会員の並河哲夫さん(大阪市)が帰幽されました。

モ二力の演奏会、様々なハイモ二力の音色を楽しみました。

6月14日 「必殺!主水死す」(須加宮寮)

6月20日 家族会主催お楽しみ会で、あじさい祭へ。

を捕えて外へ投げつけたが、どうなったか。外は真っ暗闇。吾が庭も金亀虫の匂い、闇の底

森彦

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
8月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四八七回榎会
8月9日(日) 午前9時より大倭大本宮境内の清掃神事として行います。

なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。

* 大倭教立開宣祭及び大倭神宮月次祭
8月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大本宮)
8月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 大倭会主催弥栄おどり
8月29日(土) 午後7時30分より。上欄をご覧ください。

編集後記

平成12年3月、ワネルスクールが発足1年目の旅行で、交流の家で合宿をされた。大倭紫陽花邑について青山日元さんと二人で説明役をした。以来、送られてくる「ワネルス通信」を読み、心で応援していた。今月号・4頁の森彦作さんの充実した文章がとても嬉しい。(春)

大倭会主催
いやさか
弥栄おどり

平成21年8月29日(土曜日)
午後7時30分より大倭西齋庭

8月最後の土曜日、老いも若きも、男も女も、霊界人も心をつに、いやさかを祈り楽しく踊って、日頃のストレスも発散しましょう。

求む! 準備・後片付け等の
お手伝いをしていただけるスタッフ

当日お手伝いいただける方は、大倭西齋庭へ午前9時にお集まり下さい。(お昼のお弁当は用意しております)

お問い合わせは: 青山法義まで
Tel 080-3803-7500

7月2日 ボランティアでハ-

7月5日 田んぼには草が生えていない! 草取りは中止(延期かも)になりました。

7月6日 大倭神宮月次祭。

7月7日 鏡池の木で初蟬。

7月10日 日本山妙法寺の、広島へ向かう平和行進の一行10人が交流の家に泊まり、有志の皆さんが接待しました。

大倭安宿苑では

6月27日 外出会で近くの喫茶店へ昼食に行きました。

7月7日 各ユニットで七夕の集い。うちわや風鈴などを作ったり、季節の歌を歌ったり、ゴルフゲームで遊びました。

(八重垣園)

投句箱より「七夕や老ゆれば老いの願ひあり」

俳句の風物 上田森彦(99歳)
金亀子 擲つ闇の深さかな
高浜虚子

灯のまわりを飛び回る金亀子

